

表5-3-1 加害者の“PTSD”に関する研究 1
—統計的研究

研究者	対象者の 罪状／状態	対象 事例数	備 考
Kruppa, <i>et al.</i> , 1995	触法 人格障害者	44	外傷的出来事があった41名中9名が現在診断, 14名が生涯診断でPTSDとされた。その半数では対象行為によるトラウマに関係してPTSDが発生した。
Thompson, 1998	殺人 精神障害者	80	80名中42名に, 現在診断でPTSDが見られた。そのうちの33名は, 対象行為が外傷になったと語った。
Pollock, 1999	1/3に精神 科既往歴	80	性犯罪や窃盗, 暴力犯罪, 故殺, 殺人で有罪判決を受けた受刑者が対象。52%が現在診断でPTSDとされた。
福原・宮嶋, 2000	殺人 半数ほどに精神 科的診断名	8	自分が犯した殺人の場面を夢で再体験して不眠を訴える8名の殺人事件加害者のうち6名が現在PTSDを持っていると診断された。
Spitzer, <i>et al.</i> , 2001	触法 精神障害者	53	幼児期の身体的虐待が, PTSDの原因となる外傷体験としては最も多かった(報告されたトラウマ全体の33%)が, 自らの刑事犯(15%)がそれに次いで多かった。
MacNair, 2002a	復員軍人	1638	1980年代半ばに行なわれた調査のデータを用いた研究。人を殺した者のほうが殺していない者よりも, また, 戦闘中に敵を殺した者よりも残虐行為にかかわった者のほうがPTSD得点が高かった。
福原, 2003	致死 殺人	100	600名ほどの対象者から100名を無作為抽出し, そのうちPTSDを発症していた14名について事件との関係を調査した(本文参照)。
Gray <i>et al.</i> , 2003	触法 精神障害者	37	深刻な暴力行為や性犯罪を犯した37名の精神障害者のうち33%がDSM-III-RでPTSDの診断基準を満たした。
Papanastassiou, <i>et al.</i> , 2004	殺人 精神障害者	19	家族を殺害した者は, PTSDを発症しやすかった。罪業感の存在とPTSDの発症の関係は1パーセント水準で有意であった。
Evans, <i>et al.</i> , 2007b	殺人未遂 傷害, 殺人	105	殺人や傷害罪で有罪となった105名の若い犯罪者の46%が犯行の侵襲的記憶を持っており, 6%がPTSDの診断基準を満たしていた。

表5-3-2 加害者の“PTSD”に関する研究 2
—事例研究

研究者	対象者の 罪状／状態	対象 事例数	備 考
Harry & Resnick, 1986	親族の故殺	3	精神障害やその疑いのある者が, 意識の変容状態の中で, それぞれ自分にとって重要な女性を殺害した後, PTSDを発症。
Thomas, <i>et al.</i> , 1994	実子の殺害 心中の失敗	1	妄想を抱いて無理心中を企て, 自分だけ助かった34歳の女性が, 侵襲的症狀やフラッシュバック, 繰り返す悪夢などのPTSD症状を示した。罪業感や自責の念が強かった。
青島ら, 1996	親族の故殺	2	日常的に暴力をふるう父親を刺殺した17歳の男性と, 同棲中の女性の長男を撲殺した20歳の男性の事例。事件後, 「両患者は重度の不安・希死念慮」を抱いた。DSM-IVのPTSD診断基準を満たした。
Rogers, <i>et al.</i> , 2000	雇用主の故殺 大うつ病	1	日頃から私生活や仕事ぶりや人格を批判していた雇用主の女性を, 激情に駆られて刺殺した51歳の女性。4年の服役後, 退所調整期間中にうつ病再発。侵襲的症狀や刃物の回避症状からPTSDと診断。
石塚ら, 2003	実子の殺害 心中の失敗 うつ病性障害	1	27歳の女性。事件1週間後から, 不眠や事件の反復想起, 娘を絞殺した感覚の再体験, それに伴う不安感などが持続的に出現。
安藤ら, 2007	実子の殺害 心中の失敗? うつ病	1	大うつ病性障害と診断される40代の女性の事例。子どもが小学校に入学した頃から不眠やめまいが出現。4ヵ月後に子どもを絞殺して自分も死のうとしたが失敗。幻聴や妄想などの軽快後に, PTSD類似の症状が出現。
永田ら, 2007	同室患者の 殺害 統合失調症	1	高校時代から自閉, 被害妄想などがあった36歳の男性。入院中に同室の患者を絞殺。措置入院後, 症状が軽快すると, PTSD類似のフラッシュバック, 驚愕反応などが出現。

これらの表は, これまでに行なわれた加害者の“PTSD”に関する主な研究を, 事例研究と統計的研究とに分け, 発表年順に並べたものです。わが国の研究は, 学会の口頭発表によるものも含めておきました。MacNairの研究は帰還兵を対象にしたものですが, 最初から加害者として扱っているので, ここに含めておきました。なお, これら以外に, 「犯罪者のトラウマ反応」(Byrne, 2003)という論題の, 加害者の“PTSD”を扱った論考もあります。